# Youth Post ユースポスト
日本青年団新聞

2021 Vol. 1
106巻第1号　発行 2021年1月1日
編集・発行 日本青年団協議会

〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町 4-1 日本青年館 5 階
TEL：03-6452-9025 ／ FAX：03-6452-9026
seinen@dan.or.jp ／ https://www.dan.or.jp

## CONTENTS

2-3 Action
地域を超えた語り合い（石川県金沢市）
これぞ大葛プレミアム（秋田県大館市）
子どもが育まれる地域（宮崎県宮崎市）
4-5 出会いの先に生まれたもの
6 リーダーと語る（井上貴至氏）
7 社会教育コラボ（小山修作氏）

コロナ禍であっても感染対策を徹底しながらつながる取り組みが行われている（2面）
写真提供：石川県青年団協議会

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）と Post・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

# 地域を超えた語り合い

## ～人とのつながりが、明日につながる～（石川県金沢市）

コロナ禍の影響により、世界規模で身動きがとりづらい世の中となった。青年団も活動自粛や見直しを余儀なくされている。このような状況を打破すべく11月7日～8日にかけ石川県金沢市で「中日本地区青年団地域別研修」が開催された。対象は中部地方・近畿地方の計15県で活躍する青年団員で、広範囲でつながりを形成するのがねらいだ。

活動報告に聞き入る参加者

テーマの「ぶっちゃけよう！正直にぶつけよう自分の想い」には、語り合うことで得たものを活力にしてほしいという主催者の想いが込められている。研修は3密を避ける形で開催され、参加者39名は、団体や個人で抱える悩みや課題を共有し、解決の糸口を模索する場となった。

活動報告会では、石川県珠洲市青年団協議会が10年続くのど自慢事業について、いかに趣向を凝らして地域に浸透してきたかを発表した。また主催の**石川県青年団協議会**は昨年度より始まったeスポーツ事業の実践について発表し、新しいスタイルのスポーツとしてどのように受け入れられ、2度の開催を実現したか発表された。

分科会は、青年団の役職ごとに分かれ実施された。それぞれの背景もキャリアも異なる中、普段は語りづらく、聞きにくい個々の想いや団体の実情について語り合われた。特に現状や団体での立ち位置を踏まえ、どこに留意し役割を果たしていくかに焦点が当たった。各団体の役職別に分かれたことで、事業のテーマどおり、それぞれの想いを伝え合った。また最後の全体会での発表を通じ、ほかの参加者全員での共有も図られた。

参加した羽咋市青年団協議会の堂高久事務局長は「コロナ禍において活動がしづらく手探りの状況だった。仲間から意見をもらえたり、他の取り組み事例を聞くことで新たな発想が得られたことが、今後の糧になっていく」と話した。

終了後は次の事業でまた会おうとお互いに声を掛け合う姿があり、事後アンケートではさらなる語り合いを求める声も多くあった。今、青年たちが求めているのは、青年団活動の原点でもある「語り合い」だ。青年たちが地元を超え語り合うことが、新しい発見やそれぞれの成長につながる。同世代の仲間と語り合える機会を持ち、自分たちの活動の価値に気づき、仲間の活動に学ぶ場は、一人ひとりの活動に大きな刺激になる。コロナ禍と向き合う今だからこそ、地域を超えた学び合いと語り合いの場の持ち方が社会から求められている。

問日本青年団協議会　TEL03-6452-9025

対面事業だからこそ地域を超えたつながりが生まれる

分科会では自分のことから仲間や青年団の話まで幅広く語り合う

# これぞ大葛プレミアム

## ～食でつながる輪～

## （秋田県大館市）

古くから金山で栄え、閉山後の現在では林野に姿を変えた山々に囲まれている大館市では、蕎麦でつながる**大葛地区青若会**が活動している。

人口が500人にも満たないこの地区では、2人の地域おこし協力隊員を受け入れ、地元の食品を活用した特産品の販売に力を入れている。地元に昔から伝えられてきた伝統製法の干し餅を商品化したり、蕎麦栽培など地域資源をいかした新たな取り組みに青若会も同時に加わった。

今年で10年目を迎えた蕎麦栽培は、青若会と地元の方にもすっかりなじんだ営みだ。夏に白いそばの花が咲き始めると「今年も良いできになるといいね」と多くの方に声を掛けてもらえる。種まきから刈り取り、脱穀するまで仲間総出で行う蕎麦栽培は、5年前から乾麺として販売を始めた。収穫したそば粉は業者へ委託し、乾麺に加工してもらうことで製品として店頭に並ぶ。商品化された乾麺「大葛プレミアム」は大葛温泉や「道の駅ひない」で販売し、地元の町内会の方々を招いて試食会も行っている。青若会員はそれぞれ日中は働きに出ているため、作業は週末のみと日数が限られてしまう。「忙しくて意見がぶつかることもあるけれど、夏にそばの花が咲いた時と、完成品が届いたときはみんな笑顔になる」と畠山鉄男会長も嬉しそうに語る。これからも、大葛地区に蕎麦の花と多くの笑顔が咲くだろう。

蕎麦試食会で広がる人と人の輪

問日本青年団協議会　TEL03-6452-9025

# 子どもが育まれる地域

## ～withコロナの時代を生きるために～

## （宮崎県宮崎市）

**宮崎県青年団協議会**が事務局を担う宮崎県青少年連絡協議会は、ボーイスカウトや宮崎航空少年団などの県内青少年団体からなる。県から「今こそ子どもに元気を与える事業を」という依頼を受け、連絡協議会として子どもたちが安全に楽しめるプログラムを企画し、コロナと共存というテーマで「みやざきこども未来フェスティバル」を10月18日に開催した。

当日は未就学児から小学生まで、木工教室やロケットづくりなど各団体の特色ある体験を楽しんだ。青年団ではバルーンアート教室を開き、子どもたちが自ら形を考えながらつくるなど、笑顔溢れるプログラムとなった。また北方領土パネル展も併催し、イメージキャラクターのエリカちゃん着ぐるみ登場で大きく盛り上がった。

コロナ禍での開催には、様々な不安やボランティア参加を迷う声があった。しかし私たち青年団は、この先いつまで続くかわからない状況でいかに人間らしく生活できるか、そして子どもたちの健全な育成ができるかを考えていく必要があり、本事業はその第一歩とも言える。これを機に、青年団としてできることから少しずつ地域を盛り上げたい。

思い思いのバルーンアートづくりの
向こうで北方領土についても学ぶ

宮崎県青年団協議会　黒木美保さんより投稿　問宮崎県青年団協議会　TEL0985-71-1181

# 出会いの先に生まれたもの

「サンタ事業※1」とは、全国各地で行われる青年団の年末事業の一つだ。地域を問わず、多くの青年団で行われているので、青年団の共通事業のようにもなっている。2018年、高知県土佐市青年団は「出張サンタ事業」に婚活イベントを組み合わせた。

青年団の事業が少子化に悩む地域の課題解決にもつながること、青年団にとっても事業の参加者集めや新入団員獲得のきっかけにもなる実践をお伝えする。

Focus

本番前に作戦を練ってワクワク最高潮

## ◆まずはやろう、みんなも出会おう

2017年、土佐市青年団（以下、市青年団）の森岡千晴会長（以下、会長）は土佐清水市青年団の出張サンタ事業（以下、サンタ事業）を手伝った際、若い世代がやりがいや達成感を得られる事業であること、青年団事業は男女の出会い・交流の場として相性が良いと考え、婚活イベントと合わせてやってみたい、という気持ちが湧いた。

翌年、市青年団は高知県青年団協議会（以下、県青年団）から「ぜひ『出会いのきっかけ応援事業※2』をやってほしい」と提案を受け、高知家の出会い・結婚・子育て応援団※3に登録した。

当初、初めてのサンタ事業を婚活イベントとして開催することに「（恋人同士で過ごす人が多い）クリスマスに事業をして若者が集まるのか」「初開催なのに婚活イベントと抱き合わせるのか」など不安な声も出た。しかし、会長の「まずはやってみたい」という想いや婚活イベントで主催者側にもカップルができる可能性の高さや、青年団の中で現在恋人がいないメンバーにも相手ができるきっかけにしたい、という目的もあり、開催を決めた。

## ◆事前打合せや準備が肝

過去に防災事業を婚活イベントとして開催したが、サンタ事業は初開催ということもあり、市青年団のメンバー全員が手探り状態で事前準備を行った。子どもに本物のサンタだと思ってもらうために保護者との綿密な打合せ、サンタとして活躍する若者たちに楽しみながらどうやりがいを感じてもらうか、どうしたら青年団に興味を持ってもらえるか等、団内で協議しながら準備を進めた。

参加者に何を感じてもらうか、新しく関わる人に何の役割を任せ、どの場面で青年団を身近に感じてもらうか…今まで様々な事業を開催してきた経験が遺憾なく発揮された。

## ◆待ちに待った本番

県青年団や地元大学生の協力を得て無事迎えることができた本番当日。

参加した男女がグループごとに、子どもたちの笑顔を思い浮かべて真剣に作戦を練る。その甲斐あって、サンタ・トナカイに扮する男女が現れると、憧れのサンタに出会えた子どもたちはキラキラと目を輝かせた。プレゼントを受け取った子どもの喜ぶ姿に大人も思わず笑みがこぼれた。サンタと子どもたち、保護者が一緒になって歌を歌った。また男性は一生懸命サンタとして振る舞い、女性はサンタをサポートし、各々の個性が引き立つ場面も多々あった。

婚活イベントでは男性同士、女性同士で固まることもある。そこは男性と女性が隣同士になるよう席替えをする等、男女で交流する主催者側の配慮が必要だとわかった。

## ◆青年団ファンも誕生

実施したサンタ事業では、カップルは生まれなかったが、事業後の交流会では参加した男女から「子どもやご家族が喜んでくれて嬉しかった。またサンタ事業をやりたい」と達成感に満ちた声が上がった。また、主催者側の男女メンバー間の距離が縮まり、数か月後には1組のカップルが誕生した。

サンタ事業を通じて土佐市の人に青年団や活動に興味を持ってもらい、青年団活動には出会いの魅力が詰まっていることを再認識・再確認できた。

## ◆青年団×新しい出会い

過去に開催した婚活イベントでは、初対面の男女が相手の条件に気を取られた結果、男性は高身長・高収入・見た目の良い方、女性は若くて見た目・人当たりの良い方に異性の注目が集まることが多かった。

しかし、青年団が事業を開催する際には、繰り返し交流し、一つの目標に向かって一緒に取り組む。単発の婚活イベントや数時間のデートでは知ることのできない相手の一面を発見できる。様々な事業でも男女ペアで取り組むようにするなど、工夫次第で青年団が有効な出会いの場となるのだ。

婚活イベントの参加者でも活動に興味を持ってくれた人は青年団へ勧誘し、青年団では子どもと触れ合う楽しさ・やりがいを知り、子ども対象の活動も積極的に進めたい、という想いが生まれた。

※1：青年団員がサンタに扮し、応募のあったご家庭から預かるプレゼントを子どもたちに渡す事業。

※2：高知県が少子化対策の一環として行う事業。出会いや結婚への支援を望んでいる独身者の希望を叶えるため、「高知家の出会い・結婚・子育て応援団」として登録されている団体が実施する「出会いのきっかけ応援事業」のうち、知事が認める事業の経費に対して、補助金が交付される。

※3：イベント等の実施、引合せ場所等の提供を応援として行う団体。

みんなで感想を伝え合い、交流深める

## 青年団と婚活

NPO法人全国地域結婚支援センター
代表　板本洋子

日本は世界一の結婚支援の（婚活）国家です。13年ほど前から未婚化・晩婚化による「少子化」に危機感をもった政府は、子育て支援に加え、「結婚支援」事業に数十億円の交付金を自治体に委託するようになったからです。

こうした交付金を活用し最近、都道府県はAIをとりいれたマッチングシステムをスタートさせています。

結婚や出産は個人の選択であり、行政や企業が介入する問題ではないのですが、人口減に悩む市町村は県と連携し交付金を活用した独身者の「出会いの場」づくりを拡大してきました。

予算を得ることで「婚活」は常に「成婚数」が期待されます。結婚は自らの判断で相手を選び、その関係を育み、人生を共に生きようという決断力や勇気があって決まるものです。「マッチングアプリ」や「リモートお見合い」の時代だからこそ、周囲の人と能動的に関わり、意識的に結婚を考えるリアルな交流の機会が必要だと思います。そんな意識で「婚活」を考えてほしいと思います。

青年団や若い世代が主催する結婚支援の「出会い事業」では、参加者同士より、企画・運営する実行委員同士の「結婚」のケースをよく目にします。

同じ地域に生きる若者の思いを集めて、事業の企画・運営することで、仲間意識、連帯感、信頼関係が育まれ「友情」「恋愛」につながったことに気づかされました。「婚活」の効果は「成婚数」だけではありません。地域、暮らし、人間関係の楽しさなどに気づく結婚の意欲を養うことも重大な「副次的効果」です。

婚活イベントに地域の「子育て環境」を調べる、青年団の仲間募集の場にする企画もありました。結婚にまつわる課題を話し合うワークショップもあります。希望のもてる地域づくりの機会として「婚活」プログラムを工夫してみませんか。その予算は青年団の手の届く、あなたの市町村の予算のなかにあります。

NPO法人「全国地域結婚支援センター」（P－coネット）
代表　板本洋子さん

茨城県生まれ。1969年日本青年協議会へ勤務、事務局員として青年団活動に従事。1980年、（一財）日本青年館結婚相談所の設立と同時に専任となる。翌年より北海道酪農青年と都会女性の出会い事業を開始。以来、全国各地の町村と共催の出会い事業を約20年にわたり開催。2005年以降、県や町村の結婚支援事業の企画協力や助言を行う。2012年に全国地域結婚支援センターを設立。今に至る。

# あの日・あの時・あの場所で

全国の青年団の活動をクイズでご紹介！青年団ならではの活動やそのエピソードを、写真とともにお届けします。是非みなさんの活動の参考にしてください！

※答えは右記のQRコード（日本青年団協議会Facebook）から→

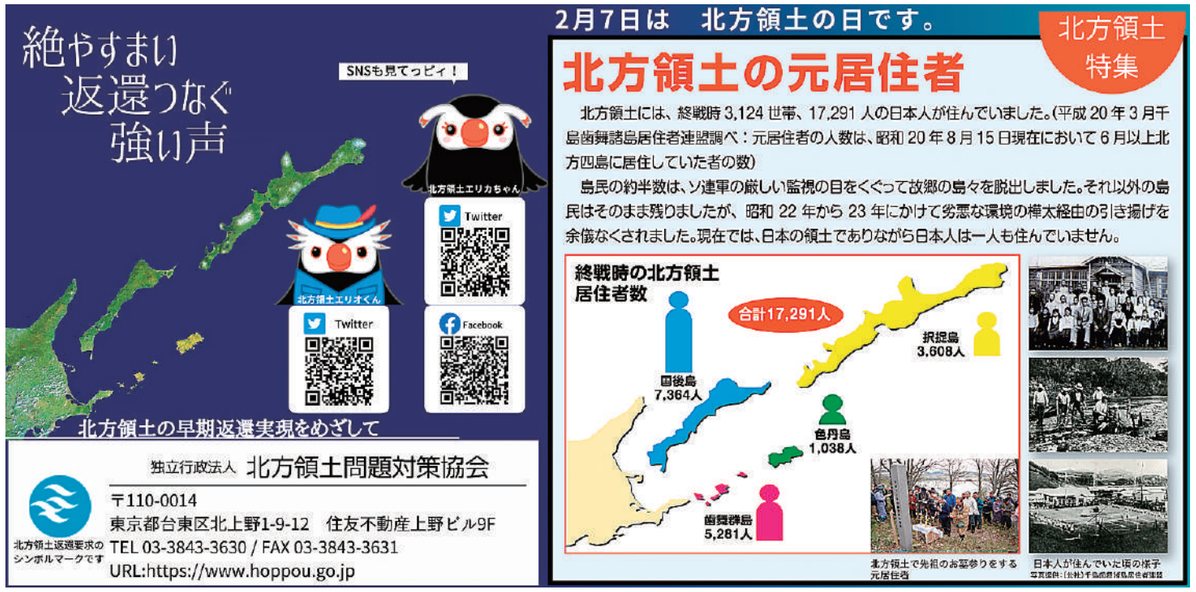
この写真は約2年前に行われた「三隅地区ふれあいソフトバレーボール大会」の一コマです。青年団からは2チーム出場しました。当時の副団長がそれぞれにかっこいいチーム名をつけましたが、その名前とは何でしょう？

ヒントはどちらも漢字2文字で、大会の成績はビリとビリから2番目と名前負けしています。試合には負けましたが、楽しんだ者勝ちということで地域の人と親睦を深めることができました！（山口県　長門市三隅青年団より出題）

この写真は青年クラブみなべの主催行事で、地域の子どもたちにお菓子まきをしているときの一コマです。さて、その行事とはいったい何でしょう？

ヒントは毎年冬の寒い時期に行っている行事で、身体を動かして温まります。おまけにもう一つヒントで、大人も子どもも楽しめてぴょんぴょん跳ねる姿が期待されます。サンタの仮装は関係ないのでひっかからないように！

（和歌山県　青年クラブみなべより出題）



# 出会いの魅力とは

（右）日本青年団協議会会長　中園　謙二
（左）内閣府地方創生推進事務局　井上　貴至氏
1985年大阪生まれ。2008年総務省入省。15年４月から自ら提案した地方創生人材支援制度の１号で鹿児島県長島町に赴任。７月から副町長（29歳は史上最年少）。17年４月からは愛媛県市町振興課長。19年４月から現職。週末は地域の隠れたヒーローを訪ね歩く。座右の銘は「ミツバチが花粉を運ぶように全国の人をつなげたい」。

社会の様々な問題に対して最前線で取り組む人と、地域を中心としたテーマについて語り合っていく本企画。2015年４月に総務省から世界一のブリの町（ユースポスト2019年８月１日発行の105巻第３号でも紹介）鹿児島県長島町に派遣された井上貴至さんに、「出会い」をテーマにお話を伺う。今回も前号に引き続き、オンライン上で対談を実施した。人との出会いを楽しみ、深めていく井上さんの考え方に触れてみよう。

## 楽しむ人の周りに人は集まる

**（中園）**「出会い」の魅力とは何でしょうか。

**（井上）**僕は不器用なんです。僕にできないことを農家や漁師のおっちゃんたちがすごく器用にします。そんな人たちに出会って、話を聞くのはすごく楽しいです！世の中はいろんな人がいて、訳わからんことを言う人が面白かったりする。ＳＮＳやゲームのように「失敗したらすぐ切り替え」もいいけど、訳わからんこと言う人や怖い先輩から学ぶことも多いです。

**（中園）**異なる価値観に触れるって楽しいですよね。でも、邪険にされて傷つくのが怖くて人に会いに行くことに苦手意識を持つ人もいます。

**（井上）**みんなが１００％賛成したり、みんなが当事者になることは逆に気持ち悪い、と徳島県神山町の方に教わりました。その人の性格やできる時期に関わりたいように関わって、無理してやる必要はないかな、と思います。天照大御神（あまてらすおおみかみ）がまちづくりの古典だと思っていて、外の人たちがどんちゃん騒ぎしてすごく楽しんでいると、自然と人は集まります。「人を集めなくちゃ」という悲壮感が見えると、みんな近寄らなくなります。

## 輝くところを見つけ膨らませよう

**（中園）**地域に足を運ぶ時に心掛けていることはありますか。

**（井上）**いっぱいあって、遠方の方と飲んだ後は手紙を書いたりします。話を聞いた後、政策として返すには時間がかかるので、若手官僚で実名のブログをつくり、地域の良いところを発信します。発信すると「ちゃんと受け止められた」と思ってくれて、次も声が掛かります。多様性の中で相手の大事にしていることを大事にし、仕事だけじゃなく、趣味等でつながりを広げて深めます。あと相手の話をしっかり聞きますね。僕は「人も地域もダイヤモンド」だと思っています。人間の性質として合わない部分や汚いと思う部分もあるだろうけど、光の当て方でどんな人も輝く部分がある。違いを見つけて対立するのではなく、合うところを見つけて共感する。国際組織に行ったら、当然文化も習慣も国の利害も違うことばかり。でも「子どもが生まれたら喜ぶ」、「家族に不幸があったら悲しむ」等のみんなが共感できる部分を膨らませることが大事だと思います。

## 正しいより「楽しい」が大事

**（中園）**心が疲れた時、どのように持ち直しますか。

**（井上）**おいしいものを食べたり、趣味の柔道をして、リセットする時間を大事にします。最初思い描いていた時と異なっても、思いがけない形で花開くこともありますし、反対意見の中に重要な意見があるんです。正しいこと同士がぶつかると、戦争になる。正しいより楽しいこと、小さな成功体験を積み上げることが大事だと思います。

**（中園）**「～すべき」は苦しいですよね。

**（井上）**僕の活動を上から「やれ」と言われたら、超ブラック企業ですよ！週末に自費で地方に行って（笑）。青年団活動も同じですよね。自分たちがやりたいからやる活動だと思うし、やりたいことだから力を発揮できる。

**（中園）**僕も青年団が好きで、一緒にやろうという気持ちが強いです。

**（井上）**好きだから継続できて、継続から価値が生まれると思います。一生懸命やったエネルギーは、必ず次にいかせます。青年団活動は仕事にすぐに役立たないかもしれない。でも、すごく長い目で見たら面白かったり、思わぬところで役立つかもしれない。青年団は自分たちがやりたいことを実現できる余地がいっぱいあると思う。青年団のみなさんには、仲間と一緒にやりたいことをやっていく面白さをどんどん体感してほしいです。

**（中園）**今後も地域で活動する仲間として共にがんばりましょう。ありがとうございました。


天然ガスがひらく未来

天然ガスは、クリーン性に優れた
環境負荷の少ないエネルギーです。

天然ガスはメタンを主成分とし、不純物を含まないクリーンなエネルギーです。大気汚染や酸性雨、地球温暖化の原因ともいわれる窒素酸化物（NOx）や二酸化炭素（$CO_2$）の排出量も少なく、環境保全に貢献する、地球にやさしいエネルギーです。

http://www.tokyo-gas.co.jp/

エネルギー・フロンティア TOKYO GAS

社会教育コラボ No.2

## 経験が力になる

小山　修作　氏
（宮城県柴田郡川崎町　町長）

社会教育の分野で活躍されている人のお話を通じて、自治体が「青年たちが育つ環境を整える」重要性を考えていく本企画。前号では雑誌社会教育の近藤編集長に、社会教育の変遷や青年団の関わりについて伺った。今号では、青年団長を経験された川崎町の小山町長に自身の経験と考えを伺う。
聞き手は日青協副会長戸嶋が務めた。

オンライン対談を行いました！

（左）日本青年団協議会副会長　戸嶋　幸司
（右）宮城県柴田郡川崎町　町長　小山　修作　氏
1957（昭和32）年生まれ。
経歴：川崎町青年団団長、川崎中学校ＰＴＡ会長、川崎町議会議員（２期）を経て、川崎町長。

### ■出会い、走り出す

**（戸嶋）** 青年団との出会いや印象に残っている活動について教えてください。

**（小山）** 40年前、夜間の大学を卒業した時、青年団の先輩に声をかけられたのが入団のきっかけです。当時、若者たちは、仙台へ行って遊んでいましたが、町に何もないのなら、自分たちで楽しめるものをつくろう！と色々なことをしました。歌手のさだまさしさんを呼んだこともあります。3時間のコンサートを実現するために3年かかりました。また、自分たちのことを題材にして演劇活動もしました。脚本の読み合わせで仲間と意見をぶつけ合ったことも忘れられない想い出です。

### ■地域に目を向ける

**（戸嶋）** 青年団活動に全力投球していた小山町長は、いつ議会をめざすようになったのですか。

**（小山）** 青年団の後、ＰＴＡ活動をするようになり、お母さんたちから「子どもたちを取り巻く環境を良くしてほしい」「町づくりには、あなたの感性が必要」と要望されました。女性の声は、強くて頼もしいものです。

**（戸嶋）** 町長になられて9年、地域に住む若者に向けて講じている施策や発信したいことは何ですか。

**（小山）** Ｕターンをした若者を受け入れるべく、職員採用試験の受験資格を延長したり、大学と協定を結び学生と職員や、小中学生との交流関係をつくったりしました。また、就任2期の8年間は、自身の給与の30％をカットして子育て支援などにあてました。青年団時代の広報部長の経験から町の広報は「わかりやすい文章で、写真が大切、多くの町民を掲載」がモットー！で自ら編集長も兼ねています。若手職員のアイデアでふるさと納税の1日町長体験や、ダム湖をめぐるマラソン大会なども行いました。たがいずれも好評で若者のアイデアを政策に活かすのは、私の役目だと実感しています。

### ■地道な行動が最大のアピールに

**（戸嶋）** これからの行政が担わなければならない役割や社会教育に対する考えはありますか。

**（小山）** できるだけ現場に足を運んで声を聞く。リーダーはもちろん、職員は現場で耳を傾ける姿勢を持たねばなりません。携帯で調べて分かることはあくまでも情報であって、体験ではありません。便利な時代だからこそ、こちらから足を運ぶことで熱意が際立つのではないでしょうか。

### ■遠回りでもいい

**（戸嶋）** 最後に、日頃青年と向き合って奮闘している方たちと読者に向けてメッセージをお願いします。

**（小山）** Ａ（挨拶は大きい声でしっかりと）Ｋ（感謝の心を忘れずに）Ｂ（ベストな体調を保ち時間を守ること）の3ヶ条が口癖です。青年団時代「青春のきら星たち」という演劇の脚本を書きました。「星が一番輝くのは、冬の風、寒風が吹き荒む夜空なんだ」というセリフがあって、状況が厳しくても一生懸命やることが青年の使命であり、特権であることをテーマにしました。どこにいても人は夢や理想を求めていけるんです。どこにいても。


毎月17日発売！
月刊 社会教育
創刊 1957 年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。
定価：本体 741 円＋税
旬報社　〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 544 中川ビル４F
TEL03-5579-8973　FAX03-5579-8975　http://www.junposha.com/

日本青年館ホール
私たちは1921年以来、
一貫して日本の社会教育、
全国の青年団を応援しています。
お問合せ ： 株式会社ニッセイまで
「日本青年館ホール」で検索！

# 地域を想う青年の鼓動に耳を澄ませよう

私たちの日常は、人と人とが直接会う機会からオンライン上で会う機会へと加速している。スマホやパソコンのアプリを活用し、遠隔地の仲間と交流するするオンライン〇〇が大流行した2020年。直接会い、じっくりと語ることができなくなったからこそ、かつての当たり前を求める声は日を追うごとに大きくなる。

日常を取り戻す動きとともに、地域に資する暮らしに向けた取り組みが進む。文部科学省は、青少年の日常生活において体験の場の損失は、青少年の健全育成及び人格形成に多大な影響を及ぼすとして、民間団体と連携した取り組みが続いている。厚生労働省は地域に住む人たちが共生していくためには、活動や課題のプラットフォームが必要だとしている。

地域の声を受け、ようやく国をあげた取り組みになったことで、青年団活動の価値に国や地方自治体が追い付いたとも言える。高度経済成長や合理的・効率的という言葉で遮られていたことが、ここ数年で霧が晴れてきたのではないか。昔から青年団は地元のために活動する以上に、地元が好きという気持ちをエネルギーに変えて活動してきた。今、地元で何かしたいという声は聞こえるものの、どう取り組めば良いのか悩み、一歩踏み出せていない青年が増えている。こうした声にもっと耳を傾けよう。

青年団活動の一つに、「出会い、ふれあい、分かち合い」がある。その名の通り、多くの人たちと出会い、語り合い、共に汗を流すことでお互いをより深く理解し共感することができる。この営みは、私たちの新たな日常でも引き続き価値のある言葉だと確信している。

## イケ団 イケてる青年団員 No.43

## 夏祭りの挑戦を経て（愛媛県）

### 毛利（もうり） 悠平（ゆうへい）さん

（鬼北町（きほくちょう）青年団団長）

鬼北町出身の毛利さん。学生時代を県外で過ごしたが、人の温かさやのどかな自然にひかれ、卒業後に故郷へ戻った。

彼のモットーは「基本的に断らない」で、職場の先輩から青年団に誘われた時も「地域の同世代とつながりを持てる」と前向きに入団した。2年目で団長就任を依頼され、当初は戸惑ったものの「交流を深められる」と思い、引き受けた。

それでも困難だったと感じたのは、毎年夏祭りで出店していた屋台の赤字改善だ。団員から意見を募り、メニューを改善。訪れた方が気軽に買える価格を念頭に置き、新メニューの宣伝に団員一丸となって取り組んだ。新たな試みで不安もあったが、なんとか黒字化を達成した。売上金で行った研修旅行で、団員同士の交流も増やすことができ、絆を一層深められたことは最も嬉しい経験でもある。

団長就任から3年が経ち、コロナ禍でも今まで取り組んだことのない活動を仲間たちとはじめ、やりがいを感じている。団員と、一つひとつ丁寧に経験を重ねてきたからこそ、今の自分がいると実感している。

仲間たちと力を合わせ、これからも鬼北町を盛り上げていく。

●高知県青年団協議会
中村勲二支局員より投稿

鬼北町にでちこんか♪（来てみいや）

## 編集後記

COVID−19が発見され1年。逼迫した医療業界と、低迷し続ける経済。友人の医療従事者からの「飲みに行けていいね」という一言には、どんな想いが込められていたのか。不安な毎日ですが、地域の青年が分厚い壁にぶつかりながらも模索し前進する姿を見ると、東京の私たちももがきながら頑張ろうと思えました。青年団ならではの経験をいかし、新しい実践へつなげるみなさんと共にこれからも精進してまいります。（し）

NISSEIKYO
～創る・結ぶ・学ぶ～

最新の情報はこちらに
https://dan.or.jp

## 令和２年７月豪雨の募金についてお礼

ユースポスト（日本青年団新聞）2020年９月号でご案内しました令和２年７月豪雨募金について、皆様より心あたたまるご支援・ご協力を頂戴しましたこと、感謝申し上げます。

あわせて、今回の募金額について下記の通りご報告いたします。

**募金額　66,073円**（12月18日時点）

皆様よりお寄せいただいた浄財は、日青協が責任を持って熊本県青年団協議会に渡し、豪雨により被災された青年たちに届けます。

改めまして、被災地域の皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早く安らかな生活に戻れますようお祈り申し上げます。

日青協Ｗｅｂサイトの募金ページでは、熊本県球磨村（くまむら）青年団が復旧作業を行う様子も紹介していますので、ご覧ください。